

ツイキャス読書会 課題図書 ディケンズ『二都物語』

信州読書会では、二週に一度、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

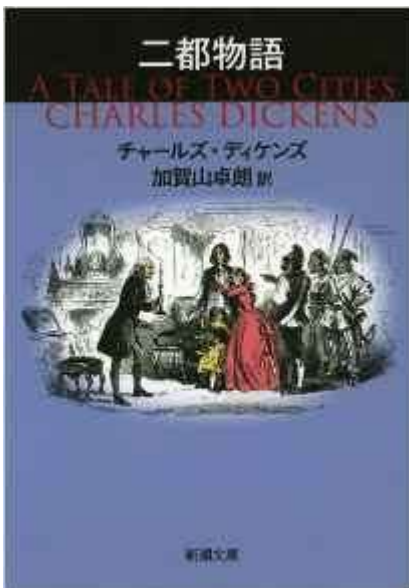
『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『Column Bar 信州 及び ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。
<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCv5e0gxXpE28Mbd0A1iGz2R>

(感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 11 回のツイキャス読書会の課題図書は、チャールズ・ディケンズの『二都物語』（新潮文庫）です。

今回もたくさんの応募がありました。初参加の方が 3 名もいらっしゃいました。
勇気をもって提出してくれてありがとうございます。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます

それではご紹介していきます。初参加、かもめさん

二都物語感想らしき

血をみて熱狂 興奮するという生き物の
原始的な衝動を 人はまだその本性のなかに
隠し持って いるのでしょうか

祭典としてのギロチン

私がもし その同時代人であったり
誰かに伴われでもして
その現場に ありましたならば

やはり この作者のように
むしろ うねり高まる
群集の姿それ自身に 恐れおののき
背後にあるものを
探らずにはおれないのかも知れません

(あくまでも 物語りとして)

今回はじめて 感想文を提出させていただきます
もともとあまり読書は 得意な方でないのですが

良き伴走者をえまして
朗読も聞き
ユーチューブで 劇も聞きかじり
筋も 覚え

それでも たったいま 走りだした走者のように
ほとんど 意見らしきを持ちえません

長きお付き合いを いただければさいわいです。

(終わり)

二都物語感想文

僕が今回、読んで感動したのはやはりシドニーです。

ルーシーに出会った事で、死んだも同然の人生の「生」に意味を見つけるが、より有意義に死ぬ事で気高い精神力を読む者に惹きつける。

特に、ローリーに逃げる手立てを説明する場面で自分が身代わりになると説明しなことに、処刑前に出会う針子を励ます場面がグッと来ました。

マネット医師含めて、蘇ることが、この作品のテーマだと思いますが、愛する人の為と、その愛した人の為に、輝けたのが処刑される事だなんて泣かせます。

シドニーの最悪の決断の果てに、2回も命を救われた(マネット医師含めると3回も。)ダーネイなんて感謝してもしきれないでしょうし、ルーシーは、シドニーを永遠に忘れてはいけない人物となり、彼ら二人の中でシドニーの気高い精神は永遠に語られ、シドニーは死んでしまっても形を変えて生き続けることが出来たのだと納得しました。

僕はミス・プロス(登場人物紹介で、じゃじゃ馬と書かれている。)が好きで耳が聞こえなくなりましたが切なさがあまりないのが良かったです。

(終わり)

(1月10日から読みはじめてなんとか読了に間に合いました。)宮澤さんの読書に対しての本気さに、失礼が無いような読み手になりたいと思いますが、僕自身歴史に疎いので一人では古典作品は深掘り出来ないので、宮澤さんの解説はとても参考になりました。読んでいる途中、僕は光文社古典新訳文庫で読んだのですが、うーん、なんだかこりゃあ訳が悪いと思いました。(難しい漢字や表現が多い。)アマゾンでの評価は良いんですが。歴史背景やどういう生活感なのか解りにくい描写が多くあるため、図書館にあった1957年に作られた映画の二都物語を借りて鑑賞し視覚的理解を得てからまた読みました。映画と原作の違いは、ルーシーが子供を妊娠したままであることと、ストライバーがルーシーを好きであるという描写が無かったことや、マダム・ドファルジュの死ぬ場面がやや違うなど映画用に短縮されていました。(ミス・プロスは難聴にならなかった。)。またツイキャス読書会後にも、改めて新潮文庫版を読んでみたいと思います。古典は読後がやはり重厚ですね。まず、今回のディケンズは宮澤さんが取り上げてくださらなければ、当分読む事はなかったと思います。いい作品を紹介してもらうきっかけを作ってください、ありがとうございました。また機会があれば、ちょこちょこ参加させて頂きたいと思いますので宜しくお願いします。

二都物語感想文

半年ぐらい前に宮澤さんの読書会のYouTubeを聞いてから、解説に感動しよく聞くようになりました。まだ、2部の途中までしか聞いていませんが、宮澤さんが声が枯れても読んでくださることに感謝し、初めてメールをします。

この本を読んで（聴いて）大変驚きました。当時の余りにひどい現状にです。王族や貴族の横暴さ、非人間性に。利権を得るために、善悪を忘れて取り付く聖職者、医者などの人達に。これらの人達に市井の人々が、復讐の気持ちを持ったのも当然のことだと思いました。

でも、革命後の行動は（略奪や処刑）は悲しいけれど、貴族の人達と近いものを感じました。

人間が生きるのに最低限の権利（衣食住）が足りなくなると、人間は人間で無くなってしまうのでしょうか。他の人間に対する愛を失ってしまうのでしょうか。この本は、人間は欲望（金欲、快楽）を誰もが持っていることを、証明した話だと思いました。

その欲望を理性で抑えさせるには、衣食住が足りることが、まず基本であり、そうすることで、愛を持ち他人を思いやる心が生まれ、それが平和な社会を創るという考えを書いた話ではないかと思いました。

ここからは私の考えなのですが、その考えが正しいか不安なので、皆さんの意見を知りたくて書いてみました。

お金持ちや頭のいい人は自分の身分や地位が、自分の力で獲得できたと思っている人が多いのではないのでしょうか。でもそれは、両親や環境、遺伝的な力によることが多いのではないのでしょうか。自分が生まれた環境に感謝して生きるべきだと思います。逆の場合もあります。借金や犯罪者などの負の遺産を生まれた時から背負っているひともいます。そこから這い上がるのは困難です。

人間は生まれたときに半分以上、運命が決められているような気がします。ですから、人間を差別するのはおかしいと思います。フランス革命のようなことが起きないように差別をしない社会をつくっていくことが、格差社会や外国の労働力に頼る日本にとって今とても必要なことだと思います。

（終わり）

『二都物語』 読書感想文

文中にシドニー・カートンを表現している箇所がある。

「すぐれた才能と心根を持ちながら正しく使うすべを知らず、己を助けることも、幸せにすることもできず、自分を損なうものに気づきながら、あきらめて身をまかせている」新潮文庫 p162 9行目

いまよりましな人間になれない。どうあがいても。

むなしい涙で枕を濡らすカートンだったが、美しいルーシーに出会い、彼女と彼女の愛する命のためなら自分の命を捧げたいと願うようになった。

信州読書会の宮澤さんが、この小説は自分の気持ちに嘘をつかない人たちの物語だと解説音声で話されていた。その真っ直ぐさは、登場人物の男性全員がルーシーのためならダーネイに代わってラ・ギョティエヌに身を捧げそうな勢いだ。その中で、一番墮落に身を任せていた人物シドニー・カートン。自分がダーネイの身代わりになる事でルーシーが幸せになれることは、カートンにとって「よみがえり」の好機だった。自分が決して目にすることはできない未来形の、マネットー族の「幸福の原石」となって代々語り継がれるだろう。現世ではライオンの手下にしかねなかつたジャッカルは、チェックメイトで賭けた。もう彼はマネットー族の誰からも忘れ去られることはない。永遠を得たのだ

それにしても、人は親子以外の誰かのために死ぬのだろうか？

カートンは、ルーシーに出会ってから、彼女の懸案をわが事として考え、没頭した。カートンの心の中では、愛しいルーシーとの境界線がもはや無くなり、自分と一体になっていたのかも知れない。神を媒介して、相手のために祈る事で大事な人と繋がれば、もしかしたらその人のために死ぬことだって現実的にありうるのかも知れない。

しかし、私にはこれ以上カートンの心中を掘り下げることができない。信仰と信念の賜物がなせる業だろう。ただもし私がルーシーなら、カートン亡き後大変な罪悪感を背負うかも知れない。人はこれほどまでに自分の愛の体現のために奔走し、誰かとの関わりの中でしか幸福を見いだせないのだ、と痛感した小説だった。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォーbelouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

『二都物語を読んで感想文』

私が一番好きな場面は、シドニー・カートンがルーシーに愛の告白をする場面です。シドニー・カートンは自分の思いがルーシーに受け入れられる事はないと思いながらも、ルーシーへの熱い愛をただ知ってもらいたい一心で伝えて、

「あなたが愛する人たちのために、喜んで犠牲になります」という深い愛が心に響いて切なくなり、涙がこぼれました。

私が思うに、シドニーはルーシーに会ったその時から一目惚れしていたのではないかと。

他の男たちがルーシーを美しいと称賛していたのに、シドニーは「金髪の人形だ！」と言っていながら、ルーシーが、気を失いそうになっていることに誰よりも早く気付いていて、私はステキな人だと思ったのと同時にルーシーの事が気になって見ていたからこそすぐに気付くことができたのだと思いました。

ルーシーの事は美しいと思いつつも、どこかで好きになってはいけないような、ルーシーと自分とでは世界が違うような気がしてたのかなと、感じました。

私は、チャールズも優しくて素敵な男性だと思いますが、シドニーも負けないぐらい素敵な男性だと思います。

でも、そう思うのはシドニーの生き方を変えたルーシーという素晴らしい女性がいたからこそだと思います。ルーシーになるのは無理な事だけど、周囲の人たちに思いやりを持って接する事が出来き、自分の存在価値が少しでもあるような生き方をしていきたいと思いました。

(おわり)

『二都物語』 感想 ～生きた証～

「人間の真価は土壇場だ」と聞いたことがある。

まさに、フランス革命という革新的かつ陰惨な有事を前に、この小説の登場人物たちは自らの人間性を否が応でも露呈していく。

人間は自分の為にだけ生きるには限界がある。カートンがまさにそうだ。自暴自棄の生活を送り、仕事でも有能さを生かさず、ストライヴァーの後塵を拝している。

幼い頃は他人の宿題ばかりしていた利他的なカートンは、美しいルーシーに出会って、彼女の幸せが人生の目的となる。

長年投獄されて廃人同様のマネット医師も、愛しい娘の婿を助ける目的の為に、思いやりのある強い頼れる男に生まれ変わる。その娘婿は、自らが投獄される原因となった貴族の親族であるにも関わらずだ。人（娘）の為に想うは、なんと大きいことなのだろう。

それに比べ自己の復讐心のためにだけに生き、配偶者にさえ思いやりのかけらさえもみせないドファルジュ夫人の末路は憐れだ。

自分のエゴだけでルーシーに求婚したストライヴァーはいうに及ばず、ダーネイや父親さえも凌駕するほどの本気の愛にカートンは突き進んでいく。

ダーネイの処刑前日に、ダーネイにルーシーとの約束を筆記させるところは・・・胸に詰まるし、景色が歪む。カートンは、自らの命と引き換えにルーシーの心を自分の居場所に決めたのだ。今まで、生きる目的を見失っていたカートンにとって、ルーシーを愛して人間らしくなっていく自分に高揚していたのかもしれないが・・・

「恋」とは自らのエゴであるが、「愛」は相手の幸せを願う無償の想いだ。それはカートンにとって、彼女自身だけではなく、自分ではない男性と結婚をし子供も生まれた彼女の人生ごと愛すことだ。しかし、それがあぶりだされるのは、平常時ではなく有事であることが人間の哀しいところだ。

ダーネイの意思は、カートンの命と共に聖女ギョティエヌの前に消えた。あとは「生きる」のみだ。ダーネイは、ルーシーの良き伴侶で、マネットの良き義息で、娘の良き父親として生きるしかない。それこそがルーシーの「幸せ」だからだ。ダーネイを愛するルーシーの幸せこそがカートンの「生きた証」だからだ。

(おわり)

岡山読書会のブログです <http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

『人生に甦る Recalled to Life』

英語の”Life”は、『人生』とも『生命』とも訳される。『人生に甦る (Recalled to Life.)』 『われは、復活(よみがえり)なり、生命(いのち)なり (I am the resurrection and the life.)』 マネット医師は、バスチーユ監獄に18年間下獄したために、理性を失っていた。しかし、一人娘ルーシーの献身的な愛によって人生に甦った。また、若くして希望を見失ったシドニー・カートンも飲酒と放蕩ゆえに荒んだ生活をしていたが、ルーシーに出逢ったおかげで、生きる意味を見出すことができた。誰かへの愛が、孤独な人間の“Life”を甦らせる。誰かへの愛によって、孤独で寂しさに沈んでいた人間は、人生をやり直すことができる、絶望して自暴自棄の人間も、復活することができる。

二都物語の登場人物たちには、最初から幸せな人間など一人もいない。ルーシーがダーネイと結婚して、彼らの小さな家庭を築いたほんの何年かが、ささやかな幸福の日々だった。だが、やがて、その平穏な生活に、遠くから足音が忍び寄る。ルーシーを中心に結ばれた金の糸は、過酷な運命に翻弄され、そのたびに、彼らは精神力を試され、また、多くの隠された事実が明らかになった。カートンが、ルーシーと交わした秘密の約束によって、彼の生命は、ルーシーに捧げられた。まるで、パズルの最後のピースのように、彼の行為は、金の糸の最も強い結び目になった。神の摂理があるとすれば、シドニー・カートンの数奇な人生こそが、彼の意志を超えた、摂理に導かれていたと描かれている。彼の生命はひとつの奇跡となった。

彼が、エゴにとらわれ、つまらない嫉妬でダーネイを見殺しにしていれば、この物語は成立しない。奇跡もなかった。カートンは、自分の人生を生きることにはなかつたし、彼の生命は、生きながらに死んだままただだろう。飲酒にふけて、自殺のような孤独な死をむかえただろう。また、マネット医師は、死ぬまで、心を閉じたまま靴を作り続けただろう。Life、つまり人生と生命、その二つが輝くとき、この世に奇跡が起こる。そう信じさせる力のある作品だ。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『二都物語』 あらすじ

第一部 『人生に甦る』

1775年に、ロンドンからドーヴァーへの道のりで、郵便馬車を追いかけて停めた男がいました。男はジェリー・クランチャー、ロンドンのテルソン銀行の従業員です。彼は、同行員のジャービス・ローリーに言付けを運んできたのです。ローリー氏は、銀行宛の秘密の返答として、ジェリーに「人生に甦る リコール・トゥ・ライフ」のメッセージを託します。テルソン銀行の顧客であった、フランス人のアレクサンドル・マネット医師が、18年間の投獄されていたバステューの監獄から釈放されたのです。ローリー氏は、ドーヴァーで、マネット医師の一人娘ルーシーと彼女の保護者、ミス・プロスと落ち合います。ルーシーは父親が死んだと信じており、彼が生きているという真実を知らされて、失神してしまいます。ローリー氏は、ルーシーをパリに連れて行って、マネット医師と再会させます。

パリのサンタントワヌ近郊では、マネット医師の元使用人ドファルジュと酒店の店主であるその妻テレーズによって彼の部屋が与えられました。ローリーとルーシーは、拘禁反応によって靴作りに没頭しているマネット医師を屋根裏部屋で見つけます。彼は、当初、娘のルーシーを認識できませんが、彼女の母に似た、青い目と長い金色の髪、彼が投獄されたときに袖の上についていた金髪によって彼女のことを思い出します。ローリー氏とルーシーは彼をイングランドに連れて帰ります。

第二部 『金の糸』

1780年、フランスの亡命貴族 チャールズ・ダーネイは、裁判にかけられています。イギリスと独立をめぐって交戦状態にあるアメリカに、イギリスの機密情報売り渡したという容疑で逮捕されたダーネイは、反逆罪で極刑を宣告される寸前でした。証人は英国スパイ、ジョン・バサード(ソロモン・プロス、ミスプロスの弟)と彼の使用人、ロジャー・クライ。しかし、チャールズ・ダーネイの弁護士ストライヴァーは、彼にそっくりの同僚、シドニー・カートンを引き合いに出し、バサードらの目撃証言の信憑性をくつがえし、無罪を勝ち取ります。ダーネイの証人として、5年前に、ドーヴァー海峡を渡る船で乗り合わせたマネット医師と、ルーシー親子も、証人として出廷していました。法廷で、シドニー・カートンは、ルーシーに一目惚れします。

パリでは、道端で、ガスパールの子を馬車で轢き殺した貴族、マルキス・エヴレモンド侯爵(原書ではそういう名前だそうです)が、補償として金貨1枚を投げつけます。事故の目撃者ドファルジュは、ガスパールを慰め、侯爵の馬車にその金貨を投げ返し、怒らせます。

領地に戻った侯爵は、彼の甥で相続人のシャルル、エヴレumontこと、ダーネイと再会します。叔父や貴族に嫌悪感を抱くダーネイは、相続放棄を叔父に告げ、イギリスで母親の旧姓 D'Aulnais (ダーネイ) を名乗のり、暮らすことを伝えます。恐ろしいことに、叔父は、ダーネイが、皮肉にもマネット医師の娘と結婚したことを知っていました。

その夜、子どもを轢き殺されたガスパールは、マルキス侯爵の馬車の下にしがみついて、彼の領地まで追いかけて、館に忍び込み、侯爵を刺殺し復讐を遂げます。侯爵の胸には、「さっさと墓に運べ、ジャックより」というメモが残されていました。一年後、ガスパールは逮捕され、村の水汲み場で絞首刑にされます。

ロンドンでは、ダーネイがマネット医師が、ルーシーとの結婚の許可を得ます。弁護士のアラン・ヴァーモ、ルーシーと結婚しようとするが、ローリー氏に助言され断念します。また、シドニー・カートンも、ルーシーへの彼の愛をも告白しましたが、彼女が彼を愛していないことを知っているため、「あなたとあなたの愛する人のためなら、なんでもします」と約束します。

結婚の朝、ダーネイは彼の本当の名前と家族の系統をマネット医師に告白します。マネット医師は、その告白をきいて、拘禁反応をぶり返し、しばらく靴作り強迫観念に陥るはめになりますが、ローリー氏とミス・プロスの献身的な看護により、ダーネイとルーシーの新婚旅行から帰る前に回復します。ローリー氏とミス・プロスは、パリから持ってきた製靴用のベンチと道具を破壊します。ダーネイの正体は、ルーシーに秘密にされたままです。彼らの間には息子（幼少時に死亡）と娘、ルーシーが生まれます。独身のローリー氏は、もう一つの家と家族同然の居場所を見つけます。ストライヴァーは3人の子もちの豊かな未亡人と結婚し、出世します。カートンは、年6回ほどルーシーの家を訪問し、家族の親友として受け入れられ、小さなルーシーの特別なお気に入りになります。

1789年7月14日のバスティーユ襲撃で、ドファルジュは、革命の人民リーダーとして活躍します。マネット医師の独房、北塔（ノースタワー）105を徹底的に搜索し、医師の書いた文書を手に入れます。エヴレモントの館が襲撃され、放火され、彼の使用人であるギャベルが逮捕されます。

1792年に、ローリー氏は、革命のさなかにテルソン銀行パリ支店に赴任して、重要な文書の保管業務に携わります。ダーネイは、アベイ監獄に収監され、処刑されそうになっているかつての使用人ギャベルから手紙を受け取ります。彼を助けるために、ルーシーやマネット医師に黙って、パリへと出発します。

第三部 『嵐のあと』

パリに到着したダーネイは、亡命貴族として逮捕されラフォルス刑務所に収容されます。彼を救出するため、マネット医師、ルーシー、娘ルーシー、ジェリー、およびミス・プロスは、ロンドンからパリに移住します。一年と三ヶ月が過ぎ、ついにダーネイの公判を迎えます。

バスティーユの英雄として崇められているマネット医師はダーネイの弁護のために証言し、無罪を勝ち取りますが、ダーネイは翌日、再逮捕されます。告発したのはドファルジュであり、マネット医師がバスティーユの独房に隠していた手記が、皮肉にも、彼の罪を告発するものになってしまいます。一方、ミス・プロスは、行方不明の弟ソロモンとパリの街なかで偶然にも再会し、不肖の弟が、フランスのスパイのバーサッドとして活動していることを知ります。その場所に、突然カートンが現れ、バーサッド（ソロモン）を1780年のダーネイの裁判で彼を反逆罪に陥れようとしたスパイであると見破ります。また、ジェリーはもう一人のスパイ、ロジャー・ク

ライが、まだ生きていることを証言します。バーサッドを英国裁判所に告発すると脅して、カートンは、バーサッドと取引をします。

公判で、ドファルジュは、エヴレumont侯爵とその兄が、ドファルジュ夫人一族を虐殺した事実を告発し、侯爵の甥であるダーネイをギロチン刑に処すことを要求します。ドファルジュは、バーサッドからダーネイの血統を聞き出したのです。証拠は、マネット医師の手記です。それは、ドファルジュ夫人の兄と姉を治療したマネット医師が、侯爵兄弟を当局に告発しようとして、逮捕されたことを訴える書き残した手記でした。ダーネイの叔父、マルクス侯爵は、ドファルジュ夫人の姉を、誘拐暴行し、助けに来た彼の弟を、決闘のすえ殺したのです。また、ドファルジュ夫人の父は心臓発作で死に、ドファルジュ夫人は、海辺の街に里子に出されてなんとか生き延びました。侯爵兄弟は、金でマネット医師の口をふさごうとしましたが、失敗したため、密告を防ぐために彼をバステュー送りにしたのです。結局、マネット医師の手記が、決定的な証拠となり、マネット医師も、告発人の一人となったまま、陪審によって、ダーネイに死刑宣告がくだされます。

その間、カートンは、ドファルジュの酒店で、夫人がマネット医師、ルーシー、娘ルーシーまでも告発しようとしているのを盗み聞きします。彼らにもギロチンが迫っています。また、ドファルジュ夫人が侯爵に虐殺された家族の最後の一人であることを知ります。マネット医師は、ダーネイ救出のためにあらゆる試みが失敗したため、靴作りの拘禁反応をぶり返します。しかし、なんとか逃げる馬車の手配だけはしたのです。カートンは、通行証明書を、ローリー氏に預けて、マネット医師の手配した馬車で、皆がいち早くパリから逃げるように促します。

死刑執行が始まる直前に、バーサッド（ソロモン）はカートンを刑務所に入れてダーネイに面会させます。バーサッドと交わした取引は、カートンが、ダーネイと入れ替わるのを、黙認することでした。カートンは、眠り薬でダーネイを気絶させ、彼と服を交換して入れ交わります。身代わりに処刑されることを選んで、ダーネイを家族とともにパリから脱出させます。カートンは、ダーネイに、ルーシーあての遺言を託しました。

一方、ドファルジュ夫人は、ダーネイの家族もギロチン送りにするためマネット医師宅を訪れます。留守番のミス・プロスに問いただし、彼らが逃亡したのを知ります。彼女たちは揉み合いになり、ピストルが暴発して、ドファルジュ夫人は、即死、ミス・プロスは、永久に耳が聞こえなくなります。

同じく死刑宣告された無実のお針子が、ダーネイとカートンの入れ替わりに気づきます。カートンの無私の勇氣と犠牲に感銘した彼女は、ギロチン台の上で、お互いに励まし合います。シドニー・カートンは、おそらく最期に思ったのは、「いましていることが、いままでにしたどんなことよりいいことだ。これから行くところは、いままでに知っているどんなところより、はるかにすばらしい安らぎの地だ」ということでしょう。

(終わり)

[英語版のウィキペディアを自動翻訳したものを参照にしました。](#)

翻訳は新潮文庫版 加賀山卓朗氏のものによる。